

バイオセラピー研究の最前線①

特集 3

苦難の研究の中から 到達した社会園芸の 理念とは

社会園芸の松尾英輔東京農業大学教授は、一貫して社会園芸という新しい教育研究ジャンルを開拓してきたパイオニアである。その研究の歴史は決して平坦なものではなく、既存の価値観や研究方法に対する戦いの連続であった。先駆者が辿る苦難の道の中から、松尾教授が到達した社会園芸の社会的使命、理念、教育方法について伺った。

1970年代の公害問題の発生が 社会園芸に挑戦するきっかけ

「私が、農耕や園芸は経済生産面だけでなく、日常生活面でも多様な効用を私たちにもたらしていることを強く意識するようになったのは1970年代の終わり頃からです。1970年代というのは公害問題が大きく取り上げられた時期です。この時期に園芸ブームが起こりました。また、安全な野菜を自分で作りたいという雰囲気が社会で高まりました。しかし、当時の園芸関係者は『遊びじゃないか』と冷たい目でみられました。私は『遊びが大切なんだ』『リフレッシュによる生きる力の大切さ』『文化と園芸の結びつきが大切だ』と考え、人間の生活面から園芸を見ていくことにしました。」

しかし、生活面から園芸を見るといっても雲を掴むような話ではないでしょうか。どのようにして研究を行っていったのですか。また、そうした研究成果はどのような学会で発表したのですか。その時の学会の反応はどうでしたか。



東京農業大学農学部
松尾 英輔 教授

調査が基本でした 学会では変人扱いされました

「社会生活の中で人々がどのように工夫して園芸を行っているかを調査するのが基本でした。まず1977年から公認された市民農園や家庭での園芸を、人々がどのような期待をもって行っているかを調査しました。そうした調査の結果、暮らしの中で農耕との関わりが非常に大きな意味を持っているということを強く確信しました。社会とのつながりから家族との関係、さらには近隣との関係を円滑にしたり、体を動かすので健康にもつながるというように、様々な役割をもっていることが明らかになりました。」

その後、生活における植物の使い方とその意味、家庭菜園や市民農園でつくる作物の種類、鉢の工夫、鉄道の



ベルリン市内のクラインガルテン

プラットフォームにおける植物の有無から時代の流れを評価するという研究をしました。

しかし、こうした研究を学会では研究成果として認められませんでしたが、変人扱いされました。論文を投稿しても何回もはねつけられました。しかし、私には園芸は生産だけではなくて人間の生活と密接な関係があり、これを欠いたら園芸の研究は半分しか成立しないという信念がありました。」

本当に大変でしたね。しかし、そうした学会の風潮や時代の流れは、その後変化してきたと思いますが、そうした変化を感じたのはいつ頃ですか。また、当時の松尾先生はどのようなことに取り組まれていたのですか。

園芸から文化や歴史がわかります

「時代の変化を感じるようになってきたのは1990年代に入ってからですね。特に農産物貿易の自由化が推進される中で、海外から果樹や野菜が多く入ってくるようになりました。こうした状況下で、いかに国内の園芸を守るかと考えた場合、生産一辺倒から生活における園芸の意義や役割を多面的に捉えることが必要になってきました。

それまで、生活園芸に取り組む研究者はほとんど現れませんでした。その理由としては、人がからむ園芸の機能評価が難しい、研究結果の再現性について実験中心の従来の考え方から抜けきれないことが指摘できます。私は従来の自然科学の発想では限界があるので、社会科学の接近法も採用してきました。そのため、できるだけ多くの標本を集めて一般的な傾向を発見するという方法で、園芸の地域間比較の研究に取り組みました。これによって、園芸と文化とのかかわり、時代的な変遷の特徴を解明することができました。例えば、ネギの仲間であ

るワケギの呼び方が地方で大きく異なっており、その背景には幕藩体制時代の支配関係や文化の違いが大きく左右していることがわかりました。また、お墓に供える花の地域間の違いから歴史や文化がわかります。

現代の商品的な農業生産では、有力な少数の品種に絞って生産をしますから地域性はあまりありません。しかし、市民農園で作られる作物は地域の特徴をよく反映しています。野菜売り場の名札を調査しているときに気がついたのが、売られている農産物の名前がいい加減に付けられているということです。これでは、農産物や植物名を正しく普及することが難しくなるという危機感もちました。小さい頃からの園芸教育の重要性を痛感しましたね。」

最近、園芸療法が注目されていますが、園芸がもつどのような機能を活用して療法を行うのですか。

園芸から学べることは育てる本能を取り戻し、社会の中でしっかり生活できるようにすること

「人間はヒトという動物です。そのためヒトが生きて



オランダ、レーネンのガーデニング



福岡市内の市民農園で

いくうえでの本能的な欲求としては、自己保存と種属保存の欲求の2つがあります。そのため、ヒトは食べ物を食べ、防寒のための衣服を着て、安全を守るために家に住みます。また、種属保存本能として『子育て』をします。子育てというのは、その子どもが種属の中で生きるための知恵を教えるという行為です。子育てでは、子どもの成長状態に応じて自分の行動をあわせることが必要になります。こうした子育てを通じて社会動物としての人間が育っていくのです。すなわち、様々な情報に基づいて的確な状況判断ができる存在になるということです。

植物を栽培する、動物を飼育するというのも、子育てとつながる意味をもっています。昔の日本の農村では、子どもの頃から植物や動物の世話をすることを通して、子育てにつながる体験をし、育てることの難しさを学んでいました。しかし、戦後の日本の農村では経済活動のことさら優先して、非効率な動植物の世話を通して育てることを学ぶという機能を捨ててきました。

こうした人間が持っている本来的な子育て本能を発揮できる場の喪失は、人間としての正常な発達を阻害します。育てる経験が欠落しているため、育児ノイローゼが

出たり、子育てに失敗したりする人が増えていると考えられています。

私たちは、動植物を育てるという行為の中で、人間が本来持っている本能を目覚めさせ、触発し、トレーニングをしていくことができます。ここに、動植物を育てる農学部の特徴があります。この育てる行動は、観賞や収穫などの狙(か)る行動とあいまって、私たちが人間らしく生きている喜びを実感させてくれます。これが、精神的、身体的、そして社会的にも私たちに健康にしてくれるのです。このような人間らしく生きる喜びを実感するところに園芸療法の基本理念があることを忘れてはいけません。つまり、園芸療法とは、療法的支援を必要とする人々が園芸を通して、人間らしく生きていると実感できるように、専門家が支援する活動であることを理解して欲しいのです。』

育てる喜びの基本は 相手のペースに合わせること

「園芸療法を正しく理解するためには、『狙(手に入れる)喜び』と『育てる喜び』を明確に区別することが大切です。手に入れる喜びを確保するための行動は自分のペースで全てできますが、育てる喜びを確保するための行動は自分のペースではできません。相手のペースで行動すること、すなわち『相手のペースに合わせ、相手が喜ぶことによって自分が喜びを得る』という行為なのです。相手に生きる喜びを与えることで、自分も生きる力をもらう。これが基本です。ですから、当大学に来年度から創設されるバイオセラピー学科の教育では、相手の立場で考え、行動して、そうした行動から喜びを感じられる学生を育てたいと考えています。』

(聞き手：門間敬幸)